季刊

四季

夏季号
—終戦記念号—

四季社

一九八四年八月十五日発行

臨川書店近代文芸雑誌
複製双書第十六次

コギト

保田與重郎・田中克己
肥下恒夫・三浦常夫 等編

自創刊号(昭和7年)
至一四六号(同19年)終刊

■A5版(原寸大)全一四六冊を一六巻に合本
別冊／解説(田中克己)・著者別総索引
■第一回配本創刊号～四九号(合本八冊)既刊
第二回配本五〇号～一四六号(合本八冊)付別冊
九月二十日発行
■定価 全一六冊付別冊 一七〇、〇〇〇円
(各巻の分売はいたしません)
■第一回配本八五、〇〇〇円／第二回配本八五、〇〇〇円

斎藤昌三・庄司浅水・柳田泉 等編

書物展望

自創刊号(昭和6年)
至一八巻二号(同26年)終刊

■A5判極上バクラム洋装合本各巻箱入
全二六冊付 著者別索引
■三回分割配本
第一回配本 九冊 既刊八〇、〇〇〇円

星野天知 編／女學雑誌社・文學界雑誌社発行
復刻版編成発行＝日本近代文学研究所

文學界

自創刊号(明治26年)
至五八号(同31年)終刊
附「うらわか草」第一号
■B5判変型全巻原寸大・一帙五八冊／「うらわか草」
菊判・九二頁附録画八枚・解説三二頁 四九、〇〇〇円

森鷗外 主宰
別冊解説・総目次 吉田精一

スバル

自創刊号(明治42年)
至五年三号(大正2年)終刊
■菊判全巻原寸大・一〇帙六〇冊・解説・総目次四〇頁
二〇〇、〇〇〇円

萬造寺斉 編／別冊解説並びに総目録 野田宇太郎

我等

自創刊号(大正3年)
至一〇号(同年11月)終刊
■菊判全巻原寸大・一帙一〇冊・解説一九頁
総目録九頁 二〇、〇〇〇円

與謝野寛 主幹／別冊解説附総目次 吉田精一

第二次 明星

自創刊号(大正10年)
至一〇巻三号(昭和2年)終刊
■B5判変型全巻原寸大・六帙四八冊・解説一八頁・総目次四四頁
二三〇、〇〇〇円

田辺茂一 主幹／別冊解説 野口富士男

行動

自創刊号(昭和8年)
至三巻九号(同10年)終刊

株式会社 臨川書店
本社 京都市左京区今出川通川端東 ☎(075)721—7111
東京支店 東京都千代田区飯田橋4-7-6 ☎(03)263—4320

目　次

手　紙 …… 堀　多恵子 表紙裏
新潟の表情 …… 植村　清二 2
沖縄の花 …… 井伊　文子 5
古謡残片 …… 浅野　晃 8
岐　陽 …… 元好問（松枝茂夫訳） 12
第二次大戦終末の印象 …… 高田　瑞穂 14
アムール河のかなた …… 大野沢緑郎 16
国破れて山河あり …… 森　亮 17
ねがい …… 花井タツ子 18
敗戦前後 …… 国友　則房 20
ＸＹＺ …… 伊達　温 22
広島原爆記念日 …… 坂口　允男 24
全面降服 …… 秦　海人 26
桑苺を喰みながら …… たかはししげおみ 28
八月・あの日 …… 小杉　茂樹 30
伊東静雄の終戦 …… 福地　邦樹 32
夏の歌と八・一五 …… 山住　正己 34
イスタンブール …… 河村　純一 38
上が開けている …… 石山　直一 40
花　火 …… 小高根太郎 42
書斎慢談 …… 矢野　蓬人 43
皿は小さくなる …… 鳥羽　貞子 46
おそれ …… 高橋　渡 48
弓神楽神弓祭 …… 牛尾三千夫 50
山　上 …… 江頭　彦造 54
至人不留行 …… 野田　又夫 56
一翦梅 …… 堀　多恵子 58
'83大阪世界帆船まつり …… 石濱　恒夫 60
わたしの言葉 …… 田中　克己 62
同人名簿 …… 63
同人規定・会員規定 …… 64

お手紙有難う存じました。

皆様お変りなくお過しのことと存じます。天沼でお目にかゝったお子様方もう随分大きくおなりでございませう。月日の経つのはほんとうに早く私共も五年目の春を追分で迎へることになりました。いつ東京に帰れますやら。

お蔭様で主人もこの頃病気が落着いてをりますので少し気が楽でございます。でももうすっかりおとなしい病人になってしまいまして食事まで食べさせてやらなければならない様な始末でございます。早く床の上に起き上れる程度にだけでもさせてやりたいと思ひますがいつのことになりませうか。よく田中さんに叱られた事を思ひ出しますが看護婦もこの頃はだいぶ上達しました。御手紙にございました「四季」のことでございますが主人次の様な事を申してをります。「四季」を休刊にしてゐる事を残念に思ってゐる。去年あたり迄は角川も年刊ぐらいにしてでも続けたい様な事を云っていたが僕が一向に相談にのれないし、他の仕事も随分忙がしいさうなので、この頃は何も言はなくなった。まだ出す気がほんとうにあるのかどうかわからない。しかしまだ出す気があって、あさた達が、さうやってお骨を折って下さるならば、僕としては勿論再刊に異存はない。喜んで出して頂きたい。

たゞこの前「四季」をやめた第一の原因は詩の作品が思ふ様に集まらなかったためなのです。

今度も矢野博士などの御協力で論文の方は立派なものが出来そうですが、はたして今詩が思ふ様に集るでせうか。いゝ詩が集らなければ、本屋に非常な負担をさせてまで、詩の雑誌をやってゆく意味はないやうに思ふが、その点は充分お考へになって頂きたい。そのためには、三好君や丸山君に大いにのり気になってもらはなければならないから、まずそのお二人とよく御相談して頂きたい。

こんなふうに申してをります。主人の気持おわかり頂けますでせうか、早く手紙ぐらい書ける様になるといいのですけれど、咳がひどいので話をすることもやっとの様なのです。もう一度元気になれて旅行出来る様になりましたら京都にゆきたがってをります。

又御目にかゝれませう、田中さんによく似ていらっしゃったお坊ちゃま、もうおいくつでございませうか。

奥様にどうかよろしくお伝へ下さいませ。

かしこ

田中克己様　（昭和二十四年五月二日付）

多恵子

新潟の表情

植村清二

大東亜戦争が敗戦に終るということは、開戦のはじめから予想していた。しかしそれが何時どんな形で終るかということは、勿論想像できなかった。昭和二十年になって、硫黄島が奪取され、沖縄が失陥し、五月にはポツダム宣言が発表された。タブロイド版の新聞の片隅に小さく報道された宣言を読んで、大体この線あたりで纏まればよいと思ったが、軍は本土決戦、一億玉砕とわめいて耳にも入れない。尤も軍では一度本土進攻のアメリカ軍を手痛く叩いて、それから和平に入るつもりであったというが、そんなことを問屋が卸すわけがない。本土全体が爆風と鮮血の舞台となるのは知れ切っている。やはり軍は降伏を自滅と考えて、全国民を巻き添えにしても、一日でも永くその権力を保持したかったのだろう。

ところへ原爆が投下された。(その当時は知られなかったが)機会を逸するなとばかりにソ連が参戦した。いよいよ末期が近づいたと、僕は病人の枕もとで脈を取る医師のような気持になった。

そこへ県から緊急の布告が来た。広島・長崎についで、第三の特殊爆弾が、新潟に投下される公算が多い。これに肩透かしを食わせるために、市民は市街を立ち退くようにというのである。新潟は当時数少ない非戦災都市の一つだから、爆撃の可能性は慥にある。市民の安全のためには疎開を勧めるのも已むを得ないかも知れない。しかし新潟の住民は、ざっと十万ある。その半分が移動するとしても五万人である。付近の農村地帯は広いが、知己朋友のある者は別として、果してどれだけ受け入れ先があるのか、またそれを輸送する交通機関はどうするのか、それらは一切ノーコメントである。夏のさ中ではあるが、一家をどこで野宿させようというのか、僕はこの時ほど役人の無能と不親切と無責任に腹を立てたことはない。僕は勿論布告を無視した。

わが家は海岸に近い砂丘の上にあった。殆ど新潟の全市を俯瞰して、その背景に飯豊の山塊が見える。すぐ目の下の道路を布告に驚いた市民たちが陸続として通って行く。みな当用の家財を車に載せて運んで行く。その大半がリヤカーである。僕はそれまで新潟の市内に、これほど沢山のリヤカーがあるとは全く知らなかった。

八月十五日は、よく晴れて暑い日であった。正午には天皇の放送があった。僕の家にはラジオがなかったから、玉音は耳にしなかったが内容は聞かないでもわかっていた。あきらめでもなく、虚脱でもなく、とうとう戦争も終ったかという安堵の感じであった。

その午後、僕は海岸の砂丘の茱萸原を歩いた。暁部隊の高射砲陣地があったが兵士の姿は見えなかった。そのあたりの一軒の家に、やはり家族は疎開したと見えて、人影も見えなかったが、裏木戸に南瓜の蔓が纏っていて、それに小さい果実が二つ三つ垂れ下っていた。敗戦という抽象的な事実よりも、この眼前の風景に、僕はしみじみと物の哀れを感じた。

沖縄の花

ー仏桑花によせてー

井伊文子

庭の芒がはらりと穂をひらき、きびしい残暑の中にもそこはかとなく秋を感じさせられるが、私の故郷沖縄はまだまだ相当な暑さであろう。そして仏桑花が、道端や、家々の庭に、真紅の花を赫々と咲かせているに違いない。沖縄の県花は梯梧ということになっているが、私にとってはほとんど一年中咲き通す仏桑花の花の方が沖縄の花として親しめる。沖縄ではこの花を、「あかばなー」と称し、あまりにも昔から見馴れすぎてしまって、無関心に近いのではないかと思われる節がないでもない。本土の方たちに仏桑花といってもなかなか通じないが、ハイビスカスというとすぐわかっていただけるものの、私はあくまでも沖縄のものは、仏桑花の名に固執する。八重咲、風鈴咲き、色も桃色・黄色といろいろな種類があるけれど、在来種の、真紅のひとえ咲きの花が素朴でよい。

戦前の故郷は貧しいけれどまことにのどかであった。

南のあさの光は仏桑の花にあかるし首
里へといそぐ

ものうげに黒き豚なくいえの垣根仏桑
の花はあかあかと咲き

酒つくる家もひっそりと昼たけたる三
箇の里に仏桑は赤し

(三箇は首里城下の泡盛をつくる本場であった)

と、仏桑花の花をここかしこに点じて、平和そのものであった。尚真王の時代に武器を捨て、かつてナポレオンが、バジル・ホールからそのことを聞き、太陽の

照らすところに戦争をしない国があるとは、と驚嘆したという。この沖縄が十七世紀の初頭、薩摩に攻略されて以来、苛酷な搾取にいためつけられ、明治十二年の琉球処分、また太平洋戦争では本土防衛の犠牲となって惨憺たる目にあい、今日まだ米国の基地に居坐られて、真の平安は招来されていない。

昭和二十年六月、沖縄戦の終結を私は胸を患う病床できいた。

血を吸いし島の仏桑が焔なし狂い咲くらむ夏のまさかり

と、その花は苛酷な沖縄戦で亡くなった人人の血潮を想わせ、悲劇につらなるものとなった。

かの島をおさめし王の血をひけるわがこの嘆き人しらざらむ

王陵のふきとびし島の現実にわれは叫ばむ〈戦よあるな〉

このような作品を、安静を守らなければならない病床で、故郷の惨状に思いをはせてかき、また文章につづってきた。

昭和四十七年本土返還を記念して、私はこれらの短歌・随想をまとめ、『仏桑花燃ゆ』と題して上梓した。本土に返還されても、沖縄問題は楽観を許さず、むしろこれからが大変であり、今迄にも増して沖縄へ対しての深い関心を持っていただきたいと思ったからである。

もし私が昔に生れていたなら、聞得大君の位を得て、黄金づくりの立派な簪を髪にさし、国王を援け神事を司どり、国政に参与し、困難に立ち向う力を発揮出来たに違いない。しかし現実の私は華族より平民となり、平凡な無力な家妻でしかなく、戦時中から戦後にかけて、ただ故郷の悲惨な運命に対し、内地に安穏と暮すものとして、懺悔と祈りとを捧げるより他なかった。たまたま、拙著の上梓を機に、沖縄に愛の連帯社会をつくりだすかけ橋として、という呼びかけで、多くの有識者の賛同を得て、仏桑花の会を発足させることが出来、今年で十一年目になる。会の内容は、一つには沖縄の心

と沖縄の現状を真に理解し、心の交流を生みだすために各方面の有識者を沖縄の地に行っていただき、沖縄の人々と交流する活動をつくりだしていただく。また、戦後、三十年近く空白状態に置かれていた恵まれない社会福祉関係に寄附を通して援助する。更に、これからの沖縄を背負ってたつ若い人達の育成の為、中学・高校生の作文・論文を募集し、優秀な作品を書いた生徒十名を選んで九日間本土見学旅行をさせる。今年も十一回目の旅行が無事終り、大きな心の収獲を得て貰った。現在、栃木県の大田原市・彦根市に仏桑花の会の支部が出来、沖縄への関心を深め、ひいては、今後絶対に戦争をしてはならないと平和を祈念するもので、それぞれの方法で活動を続けていて下さる。

ふるさとをおもいおもいて日々をあれば仏桑花のはなわが衷(うち)に燃ゆ

私はあと何年生きられるかわからないけれど、目をつぶる日まで、仏桑花の紅をわが胸にもえたたせ、この世の平和を願い、働いてゆきたいと思っている。

（歌人　彦根市長夫人　仏桑花の会会長）

石渡恒夫編『遠やまびこ』より転載

古謡残片

浅野　晃

のがれゆく足について
のがれゆく千の足について
のがれゆく万の足について
曳かれゆく足　すでに動くことをやめて
赤く凍てついた小さな足
いま八月　この炎熱の季節
地はいちめんの雪で美しく装おわれ
そこに生えている足　無数の足
　空ハ行カズ
　足ヨ行クナ

わたくしは見る　なんという小さな子らの小さな足があることよ
泣きじゃくるむき出しの小さな足があることよ
それはどこまでもつづくいたいけな墓標だ
どこまでもつづく物言わぬ小さな墓標だ
ピラカンサス　ななかまど　やぶこうじ
ショパン　スケルツォ　ポロネーズ
　カカ並ベテ
　夜ニハ九ノ夜　日ニハ十日ヲ
一寸さきも見えない夜のなかの
奪われた大地　追われた家
疲れた母や老いたるもの幼きものは歩む
たれがきき耳を立ててこれらの足音をきこうとする

小さな子らの泣きじゃくる足を見とどけようとする
足はおらぶ　お母さん
暗さとひどい寒さのなかで
かすかな呼び声さえ耳にしたものはないという
それなら　これらの物言わぬ夜は
りっぱな共犯だ
足は呼ぶ　お母さん
だがそのたらちねの母の姿はどこにも無く
声はむなしくこだまを返し
そして――時は流れた
だが何ひとつ見おとすことなく見あやまることない観自在の眼は
見ていた

清らかで美しい慈眼　この不滅の常夜灯は
見ていた
見ていた　見ていた　すべてを
　イノチノ　全ケム人ハ
　北オロシ　熊笹ノ葉ヲ
　ウズニ挿セ　ソノ子

「未来樹」所載のものを補訂

岐陽

元好問（松枝茂夫訳）

金の哀宗の正大八年（一二三一）、蒙古の大軍によって鳳翔（岐陽）・長安相継いで失陥せるを傷んで作る。元好問は時に四十二歳。

百二関河草不横　百二の関河　草横たわらず、
十年戎馬暗秦京　十年　戎馬　秦京暗し。
岐陽西望無来信　岐陽　西望すれば来信無く、
隴水東流聞哭声　隴水　東流して哭声を聞く。
野蔓有情縈戦骨　野蔓　情有りて戦骨に縈わり、

残陽何意照空城　残陽　何の意か空城を照らす。
従誰細向蒼蒼問　誰に従って細かに蒼蒼に向って問わん、
争遣蚩尤作五兵　争でか蚩尤をして五兵を作らしめしかと。

要害堅固を謳われた秦の地も十年の戦乱に踏みにじられて、草も伸びきらず、秦都長安はまっくら闇だ。

西のかた岐陽を望んでも手紙一本くるではなし、東に流れゆく隴水のむせび泣く河音が聞えてくるばかりだ。

野づらの蔓はさも情ありげに戦死者の骨に這いまつわっている。夕陽はどんなつもりでこの人げのない城内を照しているのだろう。

誰かに託して天に聞いてみたい、何ゆえ蚩尤に五種の兵器を作らせたのか、と。

※蚩尤は古代神話で、はじめて五種の武器を作って黄帝に叛逆したという無法者。

第二次大戦終末の印象

高田瑞穂

第二次大戦が終る少し前に、小生は友人の一人、大きな船の会社の重役から、「もう駄目だ、もう負ける」と告げられていたので、終戦が公に告げられた時も、別に驚いたりはしなかった。しかし国民一般に告げた政府のことばは、そう言うことで敗戦の責任をのがれようというのだったろう。「今にアメリカの兵隊が上陸して来て、暴れる。気をつけて・・」という意味のことばであった。小生はそれが腹立たしかった。

敗戦の翌年、天皇陛下が、当時小生の勤めていた府立一中においでになって、敗戦後の教育の現状をおたしかめになるということがあった。その時、丁度一中に来

られて二年目位の校長が、会議の席で告げられた。

「陛下がドアを開けて教室に御入りになったら、全員起立、最敬礼をさせなさい。」

私は、反撥を禁じ得ず告げた。

「何をおっしゃるか。陛下は、教育の現状を御覧になりたくていらっしゃるのだ。そんなことをするのは現状ではない。」

すると他の教諭たちも全部私の主張を認めてくれた。校長は、「困ったなー」とおっしゃった。私は、陛下が教室に御入りなった時も、教壇を下りたりせず、それまで通りの講義を続けた。

アムール河のかなた

大野沢　緑郎

空からの掃射に逃げまどう襤褸の母子　灼けつく陽差し。どしゃ降りと機銃のした、愛琿の街道を希みない一縷に南をめざしていた群れの幼な児たちが、四十年のこなたブラウン管の悲劇に映しだされる。白樺の小興安嶺陣地、機械化巨大軍団の包囲に、戦車やり損ね蛸壺で自らの隊長に射殺され、篠つく葉擦れの弾丸の死闘を繰りひろげていた兵士たちには、すれちがっていった無残な歩みの縦列に無言の言葉を目差しに代えるほかなすすべなかった。

武装解除の爛れた森林。仰ぎ見た満月は蒼く冴え、狼の遠吠えがきこえはじめていた。

なしえなかった渡河をダルマ船は詰め込み、押しあげられた曠野のかなたかすかに聞えて来たスンガリーのむこうの凌辱と掠奪。無法の日日のなか飽くない強制に仆れていった一〇万の死霊は、白夜と凍結の繰り返しの果て、タイガの奥うすれ見えわかぬ墓標文字のしたに積み重ねられた儘に、韃靼の海はふたたびたち騒ぎはじめている。ああ、その日、たちかえる、その日。

国破れて山河あり

わが応召記念日・二章

森　亮

一

しぬるいのちをしなざりし
数多のをのこの一人なり
こぞは召されしけふの日や
みはすくよかに家居せる

二

こぞは召されしけふの日を
昼は試験のプリントを
さ夜ともなれば目をこすり
児に尿させてまた寝むか

注――昭和二十年七月七日臨時召集により第一独立鉄道作業隊（鹿児島市）に入隊。
同年八月二十九日に召集解除。

ねがい

花井　タツ子

陽のさすところに
今日の洗いものを干して
こんな日が
ずっと続く様にとねがっている——
八才の時にけたたましいラジオからの声で
学校ではシンガポール陥落の作文を書き
空襲がはげしくなると田舎に疎開

病気になってもどって来るとサイレンは夜ばかり
私達はねかせて庭で見はりをしてくれた父
母は食糧集めに苦労し
姉や兄は動員、妹や弟は疎開した
大変な爆弾が二つおち
ビラがまかれたと言ううわさ
玉音は十二才の時
　黒い土に種をまき
　青い芽が出て
　この日が
　ずっと続くようにとねがっている。

敗戦前後

(1) 詩人の言葉

早朝　汽車に乗って
緑野を行く。
菜の花と　紫雲英で
むせ返る　筑紫路の
朝明けの　清々しさ。
読みさしの　『草の葉』を伏せ
目を閉じ　頭を後ろに倒して
涼風に　想いを馳せる。
彼の人も　敵国の詩人であった。
何時　何処にでも
通用する　言葉なんだが、
　強く抵抗せよ　少しでも服従するな・・・
　Resist much, obey little, …

国友則房

(2) 危急の秋に

その中には　ずいぶん　不合理なことも
行なわれて　いようが、
この国に生れて　ここで　こうして
生き永らえて　いるということは
それは　そのまま　ぬきさしならぬ運命だ。
善でもなければ　悪でもない。
人類の名において　それを否定もできようが、
この危急の秋に当って
わたしは　最善を尽そうとする。
いさぎよく　一切の私情を　なげうって、
われらを縛る　古い絆を　断ち切ろう。
（古い手帖から）

X Y Z

伊達　温

グラマンと呼ぶコウモリの羽根を垂直にそぎおとす　北風の申し子　メリケン製戦闘機の機銃弾が菫色の穴を空に向けあけつづける
九州小倉陸軍病院　芦屋分院の屋根の下　男はヘルニア手術のみがらをベッドの上のタンカによこたえている

XYZ

彼は動けぬみがらを看護兵の手で　土の中の土の奥の防空壕へグラマンの舌うちの合図ではこばれるときもある

XYZ

ここは蚊というグラマンのすみか　その男の頭・腹・ふとももの血を彼女たちは吸い吸い吸う
耳のうしろの甘い血も吸う　彼はきり裂かれたあとの傷のいたみとグラマン蚊が残すかゆさの中に浮ぶ　おぼれながら　片口(かたくち)でかろうじて浮び浮んでいる

XYZ

彼はあしのつけねをつっぱらせ　退院の申告を受ける主(ぬし)の姿が見当たらぬ原隊の八月十五日の廊下を不寝番の歩調で歩く　不動の姿勢というネジを歩きながらゆるめていく
五十九戦隊付属　プロペラのない三式戦闘機の傍をひとりで歩いていく　車輪止めの仕事をしていた右と左の手で　胸の認識票にさわってみる　認識票はシンチュウの板だ

XYZ

汗の胸から認識票をはずす　玄海の風に枝が鳴り続ける松林の中　彼は天に在る父(ちち)・母(はは)の目の下で　砂の中に彼の認識票を埋める

広島原爆記念日

坂口允男

一瞬の白熱光に人類の
亡びの姿ここに現ぜし

炎のみ虚空に満つる阿鼻地獄
まざまざとして逃げるすべなし

被爆せし多くの人に今も尚
心と体の深き傷跡

憎しみは憎しみを呼び環の如く
果(はて)しなき業の終(つひ)の破局か

戦争は人の心に宿るなり
人間の深き罪を思はん

幾百万の声なき犠牲の上に立つ
我等が享くる今の平和は

戦争の深き傷跡見つめずて
生(あ)るる由なし誠の愛は

（歌集『飛火野』より）

全面降服

秦　海人

万世に平和ひらくのみことのり
われは聞きけり情報室に

容易と進駐し来る米軍に
妻子の会はんことをも知りぬ

チョコレート、ガムを欲りして
よろこびて大和撫子操破らん

中国にわれは留まり子孫への
その憎しみをやはらげんかも

十月の半ばとなりて除隊して
北京をゆけば人ら道問う

わが祖は始皇帝とぞ系図には
のれりはたして華人に似たり

天津にゆくと切符を暗で買い
のりし列車に原子炸弾とかく

副総統来るを迎ふ学徒らの
しりへをもだし日界に着く

協和服つけて並べば巡警は
日本人とわれを見ぬけり

桑苺を喰みながら

たかはし　しげおみ

きみはおぼえているか　一九四五年の初夏
桑畑で唇をまっかかに染めた日を

あの日天は晴れわたり　三角兵舎の前で
ぼくたちはその朱き実をたのしんだ

いま思えば、その味をはじめて知ったのは
七つ八つ筒井筒のころであったか

あの日から三十有数年　あろうことか　ぼくは
いまも惑いつづける　桑苺を喰みながら

あれは戦いの終る数日前だったのだが・・・
そのおぞましき色に　ぼくは　さとるべきだったのに

ただその甘すっぱき味をたのしんだばかり
この赤紫色が好きだといった・・・

あの日いくさはもう終っていたのに
いまなぜか思い出すあの日を　ここ花咲町で。

一九八四年六月

八月・あの日

（日誌から）

小杉茂樹

葭簀の日除けの似合う下町

木戸の中の
下請工場
おふくろとおやじ
総領むすこに
雇人　ふたり
時雨のように
機械が音をたてている

あるじは
冷たいタンサンを
ぐいっと　一いきに
　時計のゼンマイが
　狂って
　逆まわりした
　その日
　きいろい天気

たそがれの
簾の裡　キカイの関節が熱しきって
匂ってきた

伊東静雄の終戦

福地邦樹

伊東静雄はどんな心境で終戦を迎えたか。昭和二十年八月三十日の日記に、二週間前を振りかえって記録している。

數日前から心臓ひどく壓迫を感じて痛み、脈搏時々亂れるので、十五日は休養してゐた。高岡の西のおばあさんが來て、今日正午天皇陛下御自らの放送があるといふニュースがあったと云った。門屋の廂のラヂオで拝聽する。ポツダム條約受諾のお言葉のやうに拝された。やうにといふのはラヂオ雜音多く、又お言葉が難解であった。しかし「降伏」であることを知った瞬間茫然自失、やがて後頭部から胸にかけてしびれるやうな硬直、そして涙があふれた。近所の人々は充分意味汲取れぬながら、恐ろしい事實をきいたことを感知して黙ってつき立ってゐた。國民誰もが先日の露國參戦に對する御激励の御言葉をいただくものと信じてゐたのであった。先日の露國の國境侵入の報知をきいた時、國民は絶望を、歯くひしばった心持でふみこらへてゐたのであった。高岡先生は自暴自棄的な言葉を吐いて口惜しがられる。

翌八月三十一日の日記にも、またその日の事を思い出して次のように付け加えている。

十五日陛下の御放送を拝した直後。

太陽の光は少しもかはらず、透明に強く田と畑の面と木々とを照し、白い雲は静かに浮び、家々からは炊煙がのぼってゐる。それなのに、戦は敗れたのだ。何の異變も自然におこらないのが信ぜられない。

特にあとの方の文章は、一篇の詩のように美しい。十五日当日の記録ではないらしいが、そのショックを見事に描いている

伊東静雄は第三詩集『春のいそぎ』（昭和十八年四月刊）に、いわゆる戦争讃美の詩といえるものを七篇（二十八篇中）のせている。それを伊東は戦後恥じたという。しかし自分の国が戦争をしている時に、その戦争を讃美するのは、庶民としては当然であろう。戦争に疑問を抱いて反戦の運動を積極的にするのなら偉いが、後になってから実は戦争反対だったなどと発言するのはいかにも卑怯である。伊東静雄の戦時中の日記はどこを読んでみても、庶民の一喜一憂をしながらも、大変冷静に戦況をみていて立派である。教育者としての責務を全うしているし、家族をかばって生きぬいている様も好もしい。

中学の先生として、伊東静雄は戦時中も戦後も、その態度は変わらなかったという。授業が大変きびしくて、文法などあてられ追求されて泣いてしまう生徒が続出したという。叩くことはなく、

罰は生徒を前まで手招きして黒板に鼻をこすりつけたという。しかし生徒は国語の力がつくことを感謝し、凜然とした授業を尊敬していたというのが、教え子たちのおおかたの回想である。

昭和二十三年四月、学制改革で男子の中学と女学校とが交流を行った際、伊東は府立阿倍野高等学校に転勤した。住吉高等学校の国語教員八名は籤をひいて四名をきめたが、伊東はくじには当っていなかった。当った一人の大場光雄先生が、行きたくないと大変渋った。伊東先生が「私が行きましょう」と大場先生の代りに阿倍野高校に行かれたということである。この話は、のちに大場先生自身が、住吉高校の後輩先生の中川信三郎氏（現・大阪予備校教員）に言われた話で、私が中川先生の了解のもとで記録した。大場先生は十年前に亡くなっておられるが、伊東先生が阿倍野高校で、すぐ生活指導部長などをさせられて、翌二十四年から結核を発病し、命をちぢめられたことを悔んでおられたという。伊東静雄の男らしくさっぱりした性格を表わした良い話だと思うので記した。

夏の歌と八・一五

山住正己

岩波文庫に『日本唱歌集』（堀内敬三・井上武士編、一九五八年）がある。刊行当時、評判になり、昔の歌をなつかしむ人たちのために、一本をそなえる酒場も少なくなかった。刊行後、四分の一世紀以上たって、ここにのっている歌を小学校の授業で教わった人は、しだいに減ってきた。

しかし、なおうたわれている歌も多く、この文庫は古典の地位を獲得しつつあるようにみえる。岩波書店では、文庫版では字が小さく読みづらいという人のために文庫から精選して文庫の二倍ほどの大きさの岩波クラシックスを出すようになった。その一冊に『日本唱歌集』が選ばれたところにも日本文化における小学唱歌の重みがしめされているように思う。

ちょうど夏がやってきたので、では、小学唱歌のなかに夏をうたった歌があっただろうか、と頭のなかにある唱歌集のページをめくってみたが、一曲をのぞいて、さっぱり出てこない。

その一曲は、「うの花のにおう垣根に、時鳥／早もきなきて……」に始まる「夏は来ぬ」（佐佐木信綱作詞・小山作之助作曲、一八九六年）である。これは、むろん『日本唱歌集』にのっている。しかし　小学唱歌の大部分は、作詞・作曲者の名が楽譜に明記されていない文部省唱歌である。『日本唱歌集』でも「ツキ」（「デタデタツキガ、／マルイマルイ……」）に始まる後半の唱歌の大部分は、この文部省唱歌である。この文部省唱歌に夏の歌があったろうか。なかなか思い出せない。『日本唱歌集』には、「夏も近づく八十八夜、／野にも山にも若葉が茂る。……」の「茶摘」がある。しかしこれは夏の直前であり、夏そのものをうたったのではない。

そこで『尋常小学唱歌』や『初等科音楽』など、明治末期から敗戦にいたるまでに使われた教科書を調べてみたが、予想どおり、まことに貧困であった。私の使った『新訂尋常小学唱歌』（全六

冊　一九三二年）には、「夕立」（一年）、「蝉」（二年）、「夏休」（三年）、「夏の月」（四年）、「納涼」（五年）、「滝」（六年）「霧を含む風の冷たく／さと吹来れば、夏の日の／暑さを知らぬ岩の上……」というように、各学年に一曲づつ、夏をうたった歌がのっていた。しかし、どの歌も、まったく覚えていない。

春といえば「春が来た」「春の小川」、五月になれば「鯉のぼり」（「甍の波と雲の波、重なる波の中空を、……」）、秋では「紅葉」（「秋の夕日に照る山紅葉……」）「虫のこえ」、冬では「冬景色」等々が、すぐ浮かんでくるというのに、夏の歌となると、この有様である。

国民学校時代には「花火」（「どんと　なった。花火　だ、／きれい　だな。……」）や「たなばたさま」（「ささの　葉　さらさら、／のきばに　ゆれる。……」）が登場する。二曲とも二年用であり、弟や妹がうたっているのを聞いて新鮮な歌だと感じたおぼえがある。しかし、他の学年には、やはり夏の歌で記憶にのこるものはない。

では夏をうたった名歌はないのか。春秋にくらべると少ないかもしれないが、ないわけではない。俳句では芭蕉の「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」とともに、中村草田男の「万緑の中や吾子の歯生えそむる」あたりが、すぐに出てくる。『広辞苑』で「ばんりよく」を引くと、この句が用例としてのっており、これが季語「万緑」を有名にしたもののようだ。

『朝日新聞』連載の大岡信氏の『折々のうた』ではどうか。それは、すでに岩波新書四冊になっており、いずれも「春のうた」から始まる四季別にまとめられており、四季の分量はほぼ同じで、夏が少ないのではない。ただここでの区分は厳密なものではなく、季節に関係ない人事の諸相をう

たったものがふくまれている。

「夏のうた」で目立つのは何か。

あなたは勝つものとおもってみましたかと老いたる妻のさびしげにいふ　土岐善麿

これは一九四五年八月十五日直後に作者が夫人とかわした会話を、ほとんどそのままうたった歌である。

大臣（おおおみ）が事に携はり玆に来て四月（よつき）がほどに国荒らびたり　尾山篤二郎

これも同じ時の歌である。大臣はこの年四月に総理となった鈴木貫太郎のことであろう。この作者は、終戦の詔勅に涙するのみだった歌人たちとは違っていた。

「夏のうた」には、敗戦直後の歌だけでなく、戦争をうたった歌が多い。それは『折々のうた』だけではない。夏になると『朝日新聞』日曜日の「朝日歌壇」でも戦争を切々とうたった歌が増える。毎夏、これらの歌は若者たちに読んでもらいたいと思う。

『折々のうた』には、

戦争が廊下の奥に立ってゐた　渡辺白泉

という、どきんとさせられる、すごい句がのっている。中国大陸で戦線が拡大しつつあった一九三九年の作だという。いま、廊下の奥だけでなく、わが家がまるごと「不沈空母」にのせられていたりすることはないか。日本人にとって夏八月は格別の思いがある。この夏、私たちはどんな歌をうたうのがいいか。いま梅雨空の下で、おそらく三十九年前と同じように雲一つない、たまらなく暑い八月十五日という日になすべきことは何か、を考えている。

（一九八四・六・三〇）

イスタンブール

河村純一

灯を消してしづもりゆける機内にて
外国娘の咳するがさみし

わがバスの左手なりし壊え残る
城壁がいつか海側となる

茶を捧げ茶店の給仕ゆく渚
シルエットの脚交互にうごく

後宮にかこわれ過ぎし一生か
青きタイルの壁にも慣れて

後宮の中庭に日の盛りゐて
黒猫がゆっくり過ぎてゆきけり

わが窓に夕陽さしこみ対岸の
モスクの塔に目を細めたり

目ざめゐて朝の祈りの聞ゆれば
モスクは何処(どこ)と窓あくる暗し

（歌集『近江にて』より）

上が開けている

石山直一

「前後左右みな行き詰っていても
上が開けています　感謝です」
年老いたひとりの信仰者が
その眼に涙を浮べて語った

たしかに――
時の流れの中で流転するものにとって
永遠は

時が前方に無限に続いていることでなく
上が開けていることだ

臨終の床にあっても
上が開けてさえいるならば
死も問題ではないだろう

「為(せ)ん方つくれども希望(のぞみ)を失なはず」
そのような永遠との関りのなかに生きた
信仰の大先達の言葉である。

花火

小高根　太郎

見よ、宇宙の大花火が炸裂すると、無数の星たちが八方に散乱し、狂乱の渦をまき、虹色の閃光を噴く。

ホザンナ　ホザンナ　ホザンナ

あどけない天使たちが恍惚として、主の御業をたたえて歌うが、火の祭典は何時しか終る。燃えつきた星殻は、やがて幽暗な寂滅に吸いこまれ、そこはかとない哀愁の風となって、虚無の彼方に消え去って行く。

書斎漫談（3）

矢野蓬人

外国では二、三名流の書斎に親しく立入る機会があったが、さまで羨しいものには接しなかった。然し遂に見ずして帰った名流の文庫には、近代英文学の初版その他の珍籍稀書の蒐集を以て世界に鳴るトマス・ワイズ氏の文庫がある。近代と言っても氏の蔵書中、最も誇り得るものは、十九世紀劈頭よりヴィクトオリア朝へかけての名家の著作その他曰く附きのものなので、そのアシュリイ・ライブラリイの蔵書目録は、たしか十巻あり、この目録が既に珍本となって居るから大したものだ。数年前神戸のぐろりあ・そさえての伊藤長蔵氏にこれの購入方を大に勧めておいた事があるが、如何されたか。

この目録といふのが、決して単なる書籍目録でなく、たとへば、キイツとかシェリイの手紙があるとすれば、その全文を其処に移植してあるといふ有様だから、実に重宝なものだ。同氏は、かうした珍らしい書簡や逸文の類を、二十部乃至二十五部位づつ印行され知友間に頒たれて居るが、これらが何かの機会で古本屋に出ると相当高値を呼ぶのは言ふ迄も無い。

ワイズの書誌は、実に厳密精確なもので、私も曽てその精緻さにひどく驚いた事がある——尤もこれは驚く方が野暮なのかも知れないが。テニスン卿の詩劇に『クヰン・メアリ』といふのがある。千八百七十五年に倫敦から出版されたものだが、その初版第百二十六頁の第一行目に"Beheld"という文字が"Behled"となって居る。ところが、同年出版の同一體裁のものには、それが"Beheld"と立派に訂正されて居る。僕がこの事実を如何して知るに至ったか、今確と覚えて居ないが、とにかくこの事実を弁へて居るものは古本屋仲間にも少なく、時には僕の方から得意になってこれを教へてやり、従って"Behled"とある分の売値を、思い切って引上げ

させた事さへある。これは恐らく共に初版ではあるが、その中でのFirst issue, Second issueと称するものであらう位に私は考えて居た。そして、甚だ不遜な話ながら、ワイズ先生もこれには気づいて居まいなどと、竊に高をくゝってゐたのであったが、或日大英博物館の特別閲覧室で例のアシュリイ・ライブラリイ書目の何巻目かを繙いてテニスンの条下を見ると如何だ、ちゃんとこの誤植の事が明記されて居るではないか。これには全く敬服するの他は無かった。尤も、ワイズによれば、これは、僕の想像したやうにFirst issueとかsecond issueとかの相違に基づくものでは無く、どちらも純粋の初版なので、一方が単に見本刷的に出来上った程度のものらしい。とにかく、ワイズ氏の蔵書目録の正確さは、まず斯くの如しである。よく亜米利加あたりで個人作家の書誌が出るが、それにはワイズ書誌の焼直しが多いので、先生ひどく憤慨して、数年前のタイムズ文芸附録寄書欄で堂々抗議を申込んだ事がある（續）。

皿は小さくなる

鳥羽貞子

大きな皿
若かった頃　わたしは
それに朝日を載せ
鶏の声を載せた
さわやかな食卓

あなたは　つぶやいた
朝の目覚めのさびしさを
そんなとき
やさしい人の名を呼ぶことを

夏の日
心のあぜ道に蚊張つり草が生え
わたしは十薬（じゅうやく）の花となって住みついた
見る人もなく　鳥も啼かず
蚊帳つり草は　つんつん伸び
秘めごとは終わった

秋
土の底で何かが始まる
枯葉の下で　耐える力が生まれている
小さな皿に　わたしは
あふれる程　木の実を盛る

おそれ

高橋　渡

千の手をひろげる辛夷の下に立つ
全天につぼみ莟んで
幼児の拳
竜紋の静止
億光年のひかるしずくをうけている
享ける　その意志の象(かたち)でうずまいている
看る
ひえる地熱につつまれて
見上げる
つやたついろは目にしみ

おののきのようなものにじませ
うずもれていく感覚に息をつめる
糸ひき　落ちるもの
紡虫か
凝らすと　のぼる
登って　その位置を自在　うごかない
にわかに顕(た)ちゆらぐむかしの街　ひと
よんでも　こたえない
花の下　よるのやみがひだをふかくする
紡虫は消えた
辛夷はいて　白く白い花の渦
ゆれこぼす　隕石のすな　しずく
おれの蹠を背筋にひや冷やにじみ
千の手は
天心にむかうに余念なく　抱えてもくれない

弓神楽神弓祭

牛尾　三千夫

備後甲奴郡上下町近在に残れる弓神楽、仝比婆郡西城町附近の神弓祭は、いづれも年末年始の家祈禱や、還暦・古稀などの年祝ひ、又荒神の式年祭に行はれるが、古くは若宮遊びや浄土神楽にも執行されたと云ふ。

民家の奥座敷を祭場として、四方に注連を延べ、千道、五行幡を飾り、神前に青莫座を敷き、その上に揺輪を覆せて据え、揺輪の下に御座藁十二本と半紙に包みたる少量の米を入れる。弓の弦を上方に向けて揺輪に結びつけ、その弦を打竹で打ち鳴らしながら、祭文を唱えて演奏するものである。

かく美しき　神弓祭（カウドノ）の神殿よ。　千道（チミチ）の鯛などほのに揺れをり

切り飾り　半祈禱とも云はれたり。弓神楽の初願祝詞を　今より始む

弓神楽　神弓祭の弓の音の　妙なる調べは、人を泣かしむ

五行祭文の　語りをきけば、古へも　せつなき愛に　泣きし神あり

弓の音に誘はれ出づる　なき人の　遠世のころは　あはれなりしよ

古への浄土神楽の　歌ごゑは、かくありしよと、人は語れり

「花は根に、鳥は古巣にかへる山。」かく歌ひつゝ神占（カミウラ）は出づ

いやはてに戌亥に向きて　放つ矢は、悪魔退散の音をたてたり

弓の唱行（ショウギョウ）の　歌ひ戻しのあはれさを　心に持ちて、一日暮れけり

備後地方の荒神祭祀の迹を訪ね歩く、田地春江夫人へ

秋深く　荒神々楽のあるときゝ、はるばる来つる　比和の山家へ

女一人で、比和の山家へ　入り行きて、敷荒神の迹をたづぬる

仲々に人はたやすく　語らねば、二度ならず行く、三度も四度も

霜白き　比和の山路に、咲くものは、残んの花の　野菊よりなし

荒神々楽の　神がかりせし、その様を、嘆きのごとく　見し日もありき

三十三年目、また十三年目に行われる式年荒神々楽執行後、三年目に御戸開きの一夜の神楽がある。これによって式年神楽は千秋萬歳とめでたく終ることになる。

御戸開（ミトビラ）きの　一夜の神楽を見しことも、　何のえにしか　我が来つる時

山上

江頭彦造

爽々と　風　わたる
高原の　芒の　穂波

いつもは　片目の
古女狐に　睨まれながら

群に　はぐれた
老いぼれ狐　一匹
それでもまだ　脈膊
羽毛襟巻の　暖かみ

若い日の　牧笛の
夢
赤と白との bonnet

草笛よ　鳴れ
匂いわたれ　鈴蘭

楽の　音も　まごうほどに

崖の　かなた
小さく　遠く　光っている
太陽の　ような
湖　……。

至人不留行

野田又夫

もう二十年も前のことだが、カリフォルニアのスタンフォード大学で、哲学教授のゴヒーンさんから一幅の書を示された。西田幾多郎先生の書で、至人不留行という句が書かれていた。しかし私がこのように読み下せたのはつい昨日のことで、当時は判読ができなかった。至人の「至」の字はくづし字で「玉」のように見え、不留行の「留」の字はそう読めそうに思ったのだが、「留行」というのは意味をなさぬと感ぜられた。結局私はかぶとを脱ぎ、私の世代の者は漢学の素養がなくなっていて「カケモノ」の字を大抵は読解できずただ字の恰好を眺めてほめたりけなしたりしている旨をゴヒーンさんに告白した。しかし冗談をもつけ加えた。すなわち、無理に読めといわれるなら私ならそれを玉人不夜行とでも読むであろう（「留」のくづし字は少々無理をして「夜」と読む）。そうするとそれは「美しい婦人は夜歩きなどをしない」と読め、論語の「君子危きに近よらず」の一例をのべたものとなるであろう。ゴヒーンさんは私の冗談を、目を丸くしてきいてくれた。

帰国後早速そのくづし字を紙に書き西田先生の高弟である先輩の意見を求めた。しかし「どうも読めない」という返事である。こうして禅学者でも書画には一向熱心でない人もあることを知り、私も改めてそれに倣うことにし、かの一句を読むことをあきらめて二十年を過したのであった。

ところが昨年ゴヒーンさんは「もう自分も年をとってこういうものの必要もなくなったから」といって、当の軸を、人を介して私に下さった。思いがけぬ異国の友人の好意で、いままで持たなかった西田先生の書を持つ身となった。しかしこれでふたたび一句の読下しの課題を与えられることになった。お礼状を書くにも「字が分らぬ」では失礼だからである。

そこで何とか独力で解読しようと「くづし字字典」のようなものも見たが中々らちが明かない。ある日久しぶりに出逢った旧知に苦衷を訴えたところ、その句に似たものを西田先生の墨蹟集で見たように思うから家に立寄って見て行けという。親切に甘えて見せてもらうと、何と第一頁に同じ句を横書きにしたものが録せられており、「至人不留行」と読んである。「玉人」でなく、従って「美人」ではなく、「至人」だったのである。そして「至人」という以上、出典は荘子にあるはずだと、帰宅早々荘子の頁をくった。そして「至人」という字には度々出会ったのだが、「不留行」と一緒になった句はとうとう見つけ出せなかった。実はそこにあったのだが私には見えなかったのである。

しばらく後、福永光司教授にお会いしたおり質問に及ぶと、言下に荘子雑篇中の外物篇にあると教えて下さった。別に神戸大学の友人も同僚の漢学者に訊いてくれていてその方からも教示が届いた。道に達した人は何ものにも妨げられず自在に濶歩する、という意味らしい。「不留行」は「行を留めず」と訓読しているらしい。

福永さんは金沢北郊の宇ノ気村にある西田先生の蔵書を検して唐代に書かれた荘子の注釈の古い版本を見出された由である。先生は晩年に荘子を愛読されたらしい。

私自身は、五つの字が見事に躍っているのを眺めながら、とりとめもないことを考えている。至人は仙人に類するから空中を自在に飛行するのであろう。しかし仙術修行中の若者の苦い経験の話も思い出される。師匠は壁に向って歩み、「留行せず」に壁を通りぬけ向うに出たが、同じ呪をとなえつつ勢よく進んだ弟子のはうはつき当って額にこぶをこしらえたのであった。こんなむかしばなしをなつかしく思い出している。

（京大名誉教授・甲南女子大学教授・「野田又夫著作集」白水社）

一翦梅

堀　多恵子

紅藕香残玉簟秋、軽解羅裳、独上蘭舟。雲中誰寄錦書来、
雁字回時、月満西樓。花自飄零水自流、一種相思、両処閒愁。
此情無計可消除、才下眉頭、却上心頭。

紅い蓮の花は咲き終り、ひややかな竹のむしろと思わせるような秋となりました。軽く絹のもすそを解いて、たゞひとり美しい舟に乗りました。雲のかなたから誰かが良い便りを寄せて来たようです。雁が一文字になって南に帰る時、月が西の樓に輝いていました。あなたはいつ帰って来られるのでしょう。花はひとりでに散り、

水はひとりでに流れてゆきます。ともに思う心は一つなのに、二つの処に別れ別れになって淋しい思いです。この思いは消し去るすべもありません。わずかに愁の面持がうすれたと思っていますと、却って心の中はさびしさにうずいてまいります。

易安（李清照）の夫明誠は結婚後間もなく旅に出て、なかなか帰って来ません。易安は淋しく、不安でたまらず、錦帛にこの一翦梅の詞を書いて送ったということです。夫、趙明誠は金石文の研究家で、二人は大変仲の良い学者夫婦であったと書かれています。

'83大阪世界帆船まつり

―帆船讃美〈巻頭詩〉―

石濱恒夫

地球儀を指でくるくる
まわしながら思いははるか海と空
水平線かぎりなき波濤の円盤
季節風あるいは貿易風はたまた偏西風
陽は昇り陽は沈み翻け満ちる月

はらんだ帆の乳房たわわに
潮路に虹ひく白い水鳥たちのように
たどりあつまった東洋の島国の
この内海の奥の一点の港
大阪湾のまっかな夕焼けが語りかける
イルカよ若者よわれらみな海の子

わたしの言葉

田中克己

第５次『四季』の発刊以来，わたしはタバコはへらし，学問もいい加減にして，編集（名ばかり），同人費，会員費の受取り（いちいち受領の旨を書いている）をやるばかりか，これが受領印が必要というので，家中（といっても愚妻と二人）留守には出来ず，さて発行となると印刷者との交渉，校正など，これも家内に協力を頼むが，旧制女子高校出の老姫なので，こんな者の協力は気休めにすぎない。第二号など野上吉郎氏の作品では大ポカをやって，叱られた。もういやになったが，止めるわけにもゆかない。来る原稿にも大先生たちはともかく，同人，会員は堀さんの『四季』など見たこともないという有様である。三号は夏季号なので「夏が来れば思い出す，はるかな（尾瀬ではない）終戦の日」である。終戦後，華北のわたしの隊では手榴弾自殺が１名出ただけで，あとは国民党軍の北上を輸送する大動脈の京漢線の警備で，毎日死傷が出る。敵であるハ路軍（いまの中華人民共和国軍）からは，ポツダム宣言を日本天皇は受諾したとガンガン放送して来る。隊内では相変らず軍規厳正で，二等兵であるわたしはあらゆる使役に使われる。米軍が厚木に来て日本に事実上の軍政をしいたことがわかるのは。大分後であるが，その軍規は厳正かいなか一向にわからない。もう愚妻や長男からの便りも来ない。詩も俳句も「国破山河在」の杜甫の作品を思い出すのみであった。本号は「終戦（敗戦といえ！）特集号」とし，一部の人から賛同を得た。人さまざまである。酒食喫煙を節している体重４０キロのわたしに太る薬でも配給して欲しいと述べておく（７月某日　午前４時，排尿にさめたあと）。

同人名簿

（順不同）

＊植村清二	176	練馬区桜台６－８－５
岩崎昭弥	502	岐阜市近島２３２
石山直一	559	大阪市住之江区住之江１－３－１０
牛尾三千夫	694	島根県邑智郡桜江町市山４７４
＊小高根太郎	156	世田谷区桜１－６３－６
高橋しげおみ	632	天理市三島町１００
福地邦樹	578	東大阪市新庄２４１－１７
江頭彦造	167	杉並区下井草２－１６－１２
川村欽吾	036	弘前市豊原２－３－３５
＊小杉茂樹	421-05	静岡県相良町波津７６２－２
伊達温	565	吹田市尺谷２４－５
＊野田又夫	602	京都市左京区松ケ崎三反町５
坂口允男	630	奈良市高畑大道町１２３２
金井寅之助	670	姫路市野里慶雲寺前町７０７
石濱恒夫	558	大阪市住吉区墨江２－５－６
＊松枝茂夫	167	杉並区本天沼２－３７－２１
山住正巳	166	杉並区阿佐谷南１－３８－２
＊藤澤桓夫	558	大阪市住吉区上住吉２－１２－４
秦海人	181	三鷹市下連雀４－５－１３　小林方
＊高田瑞穂	157	世田谷区成城２－４－２０
田井中弘	520-03	大津市伊香立下在地町９１４
＊矢野峰人	158	世田谷区深沢２－１４－１７
＊浅野晃	151	渋谷区本町３－３２－１－１００４

（＊は名誉同人）

新同人

（順不同）

＊河村純一	522	彦根市中央町７－５
高橋渡	158	世田谷区奥沢１－６３－５
花井たづ子	176	練馬区旭丘２－３６
大東幸子	574	大東市諸福３－６－１０
大野沢緑郎	235	横浜市磯子区上中里町１０２８－３－３１１
藤野一雄	522	彦根市本町１－８－２７
森亮	572	寝屋川市木屋町１０－１８
国友則房	184	小金井市本町３－１－２０

（同人規定）

1．同人は田中が『四季』にふさわしい作家を選び，毎号のせることとする。

1．老大家※以外は同人費として投稿毎に2,500円（送料共）を納めること。

1．なるべく常用漢字，常用かなづかいを用いること。（短歌・俳句・川柳・引用文等は別にする）

1．当雑誌を各方面に広く配布してもらい，売金を刊行元に送金（郵便振替　東京８－１３２９２４四季社）してもらいたい。（送料引）

1．同人に適当な人があれば紹介してほしい。

（会員規定）

○ 会員は男女職業年齢を問わない。
旧『四季』を閲覧し，堀辰雄氏を愛した経験のあるものに限る。

○ なるべく常用漢字，常用かなづかいを用い，創作であること（２ページ分が望ましい）。

○ 会員費として４ケ月分2,０００円（送料８００円）を，振替東京８－１３２９２４　四季社まで納入してほしい。

○ 同好者を誘ってもらいたい。

季刊　四季　第三号　定価800円（送料200円）

発行　四季社
〒166　東京都杉並区阿佐谷南１－40－８　田中克己方
電話　03（314）２７８３

印刷　スバル ライフサービス
〒167　東京都杉並区松庵１－１７－５
電話　03（333）3959